

三雲・井原遺跡群 調査概要

(1)

福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡群

重要遺跡確認調査概要

前原市文化財調査報告書

第 62 集

1996

前原市教育委員会

序

三雲・井原遺跡群は文政5年（1822）に前漢鏡35面、ガラス璧、有柄式銅剣などの豊富な副葬品を出土した三雲南小路遺跡、天明年間に方格規矩鏡21面、巴形銅器3等が出土した井原鍮溝遺跡、古墳時代前期の前方後円墳である築山古墳、端山古墳などを含む、重要な遺跡群であります。この地区は魏志倭人伝に登場する「伊都国」の中心と考えられ、重要な遺跡が数多く存在することが知られています。

現在この地区は水田が広がる純農業地帯であります。しかし、ここ十数年来前原市は福岡市のベッドタウンとして急速に宅地化が進んでおります。バブルの崩壊とともに急激な開発行為は影を潜めましたが、このままの状況で将来にわたり遺跡を保存してゆくことは到底不可能であります。そこで当教育委員会では遺跡の保存計画の資料を得るために平成6年度から国・県の補助を受けて遺跡の確認調査を行なっております。

本書は平成6～7年度に実施しました三雲南小路遺跡の確認調査の概要です。今後、当教育委員会といたしましてはさらに確認調査を実施し、その結果をもとに全体的な遺跡の保存・環境整備の計画を策定したいと考えております。

なお末筆となりましたが、発掘調査について快諾戴きました地権者の平山昌子氏、窪義孝氏および前原市土地開発公社には深謝の意を表します。

平成8年3月31日

前原市教育委員会

教育長 樗 木 昭 生

例 言

1. 本書は平成6～7年度に国・県の補助を受けて前原市教育委員会が実施した三雲南小路遺跡の重要遺跡確認緊急調査の概要報告である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は角 浩行、瓜生秀文、平尾和久（福岡大学学生）、川上豊子、川上久美子、坂本悦子、市丸千賀子、中原マチ子、米山八重子が行った。
3. 本書に掲載した図面の製図は角、瓜生が行った。
4. 本書に掲載した現場写真の撮影は角、瓜生が行い、遺跡全景写真は(有)空中写真企画の撮影によるものである。
5. 本書に示した方位は磁北である。
6. 本書の執筆、編集は角が行った。

本文目次

I. はじめに	2
1. 調査にいたる経過	2
2. 調査の組織	2
II. 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. I区(453-1~3、454番地)の調査	5
3. II区(427-1番地)の調査	10
4. III区(436番地)の調査	11
III. おわりに	12

挿図目次

Fig. 1 調査地点位置図(1/5,000)	3
Fig. 2 調査区配置図(1/500)	4
Fig. 3 溝状遺構土層断面図(1/40)	5
Fig. 4 I区全体図(1/100)	6
Fig. 5 溝状遺構土器出土状況	8
Fig. 6 3号甕棺	8
Fig. 7 4号甕棺	9
Fig. 8 住居跡	9
Fig. 9 II区土層断面図(1/40)	10
Fig. 10 III区全体図(1/60)	11
Fig. 11 I区全景	13

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

三雲南小路遺跡は文政5年(1822)、偶然に発見された甕棺墓(1号甕棺)から前漢鏡35面、ガラス璧、有柄式銅剣などの多量の副葬品が出土している。その後この甕棺の出土地点は、長い間不明となっていた。この間、中山平次郎が「柳園古器略考」、「筑前國續風土記拾遺」の記述をもとに細石神社の西方約50m付近、現在の大字三雲453番地付近を発見地点と推定している。そして、昭和49年度から行なわれた福岡県教育委員会の発掘調査で、中山が発見地点と推定した場所からおびただしい銅鏡の破片とともに甕棺が発見され、文政5年の発見地点であることが確認された。

この調査によると1号甕棺は完全に掘り上げられており、わずかに甕棺の破片が出土したのみである。副葬品については重圈彩画鏡、四乳羽状獣文地雷文鏡、異体字銘帯鏡の破片、ガラス璧、ガラス製勾玉、ガラス製管玉などが出土している。これらの出土品は「柳園古器略考」の記載と一致し、当時取り残されたものである。この他に新たに金銅四葉座飾金具が発見されている。さらに、1号甕棺に隣接して甕棺(2号甕棺)が発見されている。2号甕棺は接口式の甕棺で、上甕が器高(復元)121cm、胴径87cm、下甕が器高122cm、胴径89cmを測る超大型の甕棺である。副葬品としては星雲鏡、異体字銘帯鏡、ガラス製垂飾、硬玉製勾玉、ガラス製勾玉などが出土している(柳田1985)。

この調査では1、2号甕棺に伴うと考えられる溝の一部が検出されていたが、調査地が個人の宅地内ということもありそれ以上の調査は不可能であった。その溝は甕棺の墓域を区画すると考えられ、周辺の調査の結果からその規模は東西約32m、南北約22mと推定された。

その後、平成6年になり住宅が移転することとなったため、問題の溝が甕棺の墓域を区画するかどうかの確認調査が可能となった。そこで、当教育委員会では発掘調査を実施し、溝の続きを確認することとした。また、甕棺出土地点の北東にあたる宅地、南側にあたる田についても確認調査を行なうこととした。

2. 調査の組織

平成6～7年度の発掘調査に関わる組織は以下のとおりである。

地権者	前原市土地開発公社	平山 昌子	窪 義孝
調査主体	前原市教育委員会		
総括	教育長	樗木 昭生	
	教育部長	中原 直国	
	文化課長	井上 尚	
	文化課文化財係長	川村 博	
庶務	同 文化振興係長	清水 真澄(平成6年度)	
	同	宮本 洋子(平成7年度)	
調査	同 文化財係主事	角 浩行・瓜生 秀文	

なお、調査にあたりご指導いただきました福岡県教育委員会指導第二部文化課の柳田康雄文化財保護室長、橋口達也調査班総括には心より感謝申し上げます。

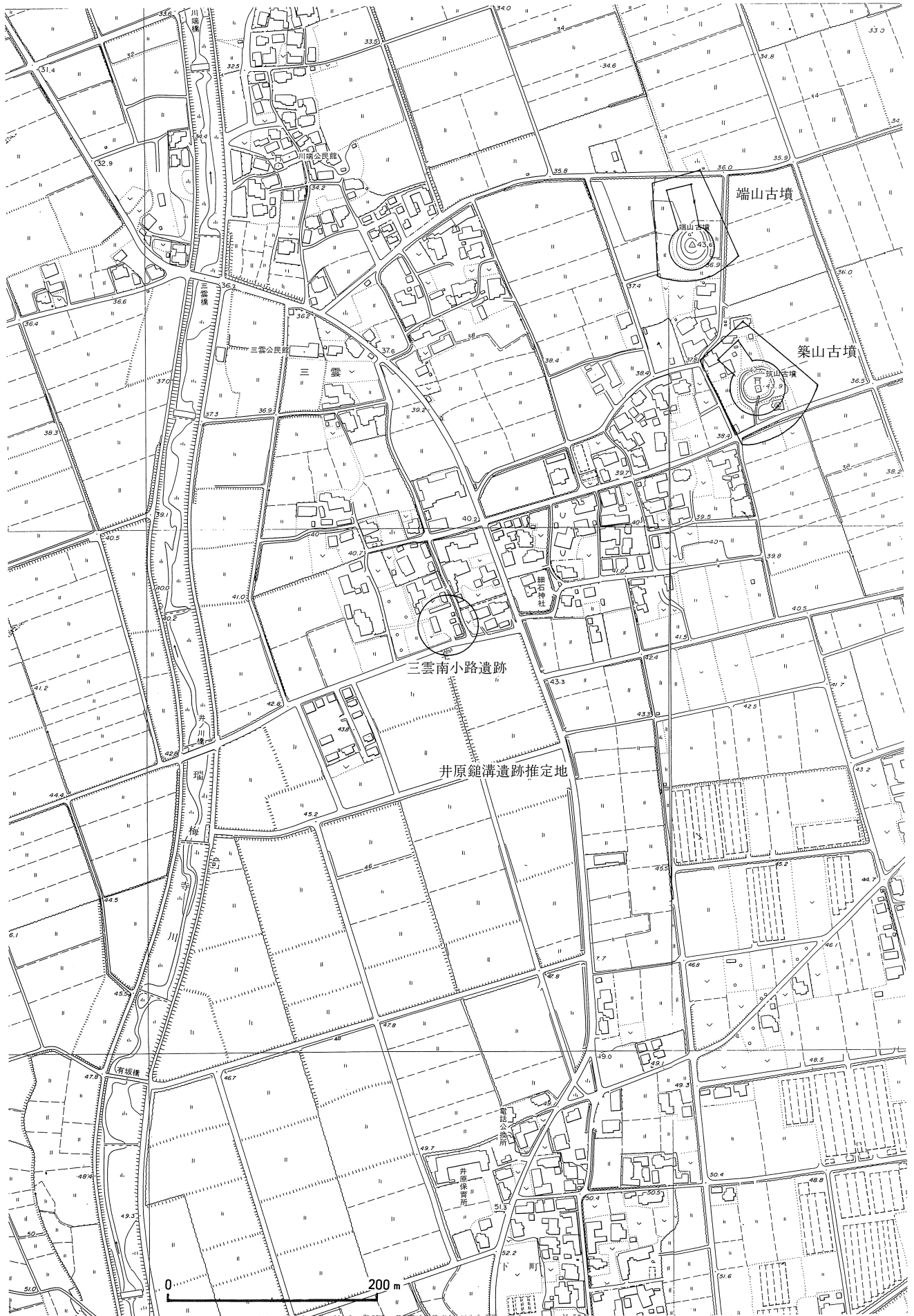


Fig.1 調査地点位置図 (1/5,000)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

調査は昭和49～50年度の調査（以下「1次調査」と記述する）で検出された溝状遺構の続きを確認することを主な目的とした。また、溝状遺構と1、2号甕棺の位置関係を把握するために、1次の調査区についても埋め戻した土を剥ぎ取り遺構の確認を行なうこととした。そこでまず大字三雲453-1～3、454番地に調査区（I区）を設定した。

調査は1次の調査地点を埋め戻した土を剥ぎ取ることからはじめた。地表面から慎重に土砂を剥ぎ取ってゆくと、深さ約50cmのところ遺構面を検出することができた。埋め戻しは真砂土によって行なわれており、遺構面の確認は容易にできた。その後、西側へと表土を剥ぎ取ってゆくと溝状遺構（大溝）が検出された。検出面での幅は約7mであった。この溝状遺構は3本の溝が重複したものであり、これは1次調査の結果と一致する。溝状遺構は北に向かって延びており、調査区外に続いている。埋土からは多量の土器が出土しており、時期的には弥生時代中期末から古墳時代前期にかけてのものが見られるが、主体を占めるのは弥生時代後期のものである。

その他の遺構としては甕棺、方形住居跡、土坑、ピットなどが検出されている。甕棺は複合口縁壺を使用した古墳時代前期のものである。

また、1次調査で推定された甕棺墓域の範囲を確認する目的で、427-1番地（II区）および436番地（III区）にもトレンチを設定した。しかし、住居跡、土坑、ピット等を検出したのみで、墓域の範囲を画するような遺構を確認するには至らなかった。

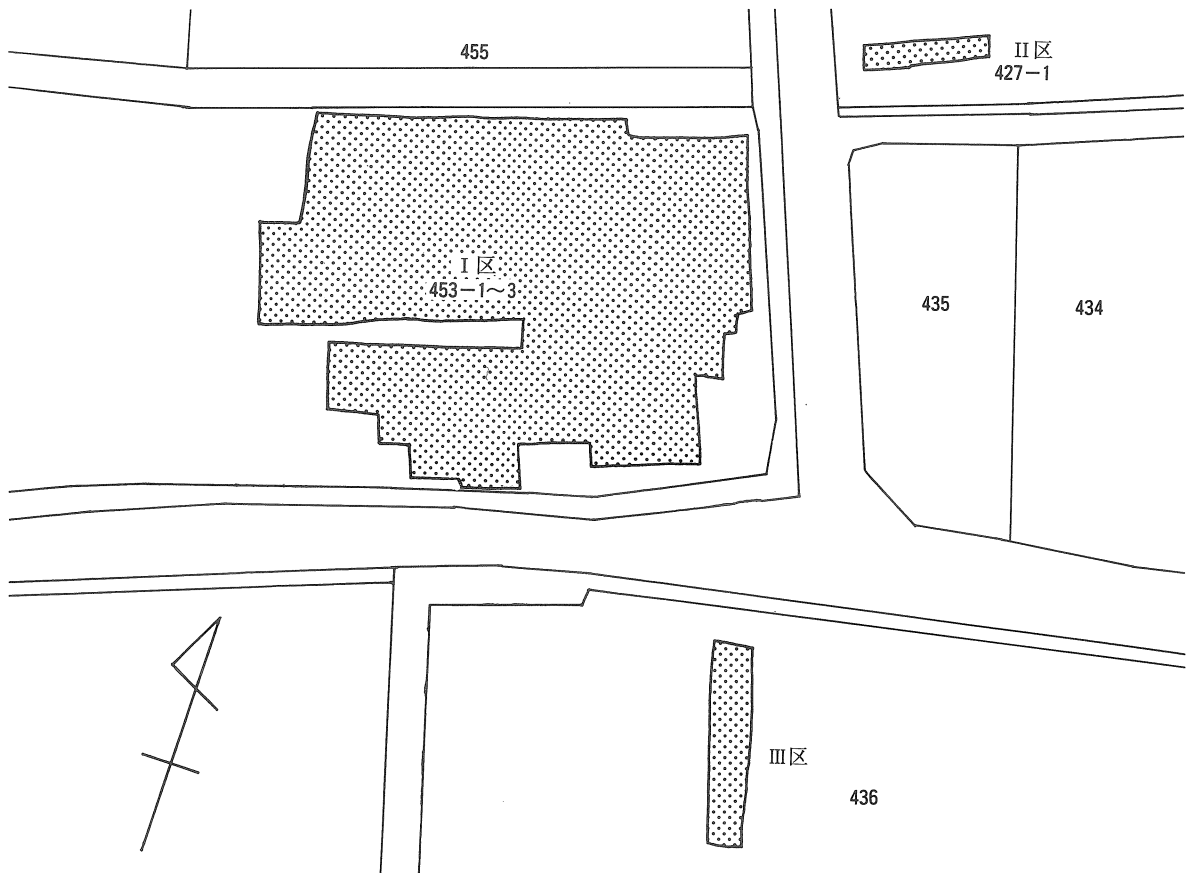


Fig. 2 調査区配置図（1/500）

2. I区 (453-1 ~ 3、454番地) の調査

(1) 溝状遺構

調査区の中央やや西側で検出された南北方向の溝である。幅は約7 mであるが、調査の結果3本の溝が重複していることが判明した。

1号溝

3条の溝の中でもっとも新しいもので、Fig. 3の黒褐色土層（第1層）がそれである。幅5.76m、深さ28cmである。溝内からは土器が多量に出土したが、ほとんどが破片である。時期的には弥生時代後期のものが目立つが、土師器も若干みられる。1次調査における「大溝」にあたるものと考えられる。時期は古墳時代前期であると考えられる。

2号溝

3条の溝の中で2番目に新しいもので、Fig. 3の暗茶褐色土層（第2層）がそれである。1号溝に切られており、幅2.32m、深さ54cmである。溝の中央から南部にかけて大量の土器が出土している。時期的には弥生時代後期前半～中ごろのものが主体をしめているようである。1次調査における「小溝」にあたるものではないかと考えられる。

3号溝

3条の溝の中でもっとも古いもので、Fig. 3の茶褐色土層（第3層）がそれである。1、2号溝に切られており、幅3.31m、深さ26cmである。遺物の出土量は他の溝にくらべ、かなり少ない。出土土器の時期としては弥生時代中期末～後期初頭のものが多くみられる。1次調査における「祭祀溝」にあたるものと考えられる。

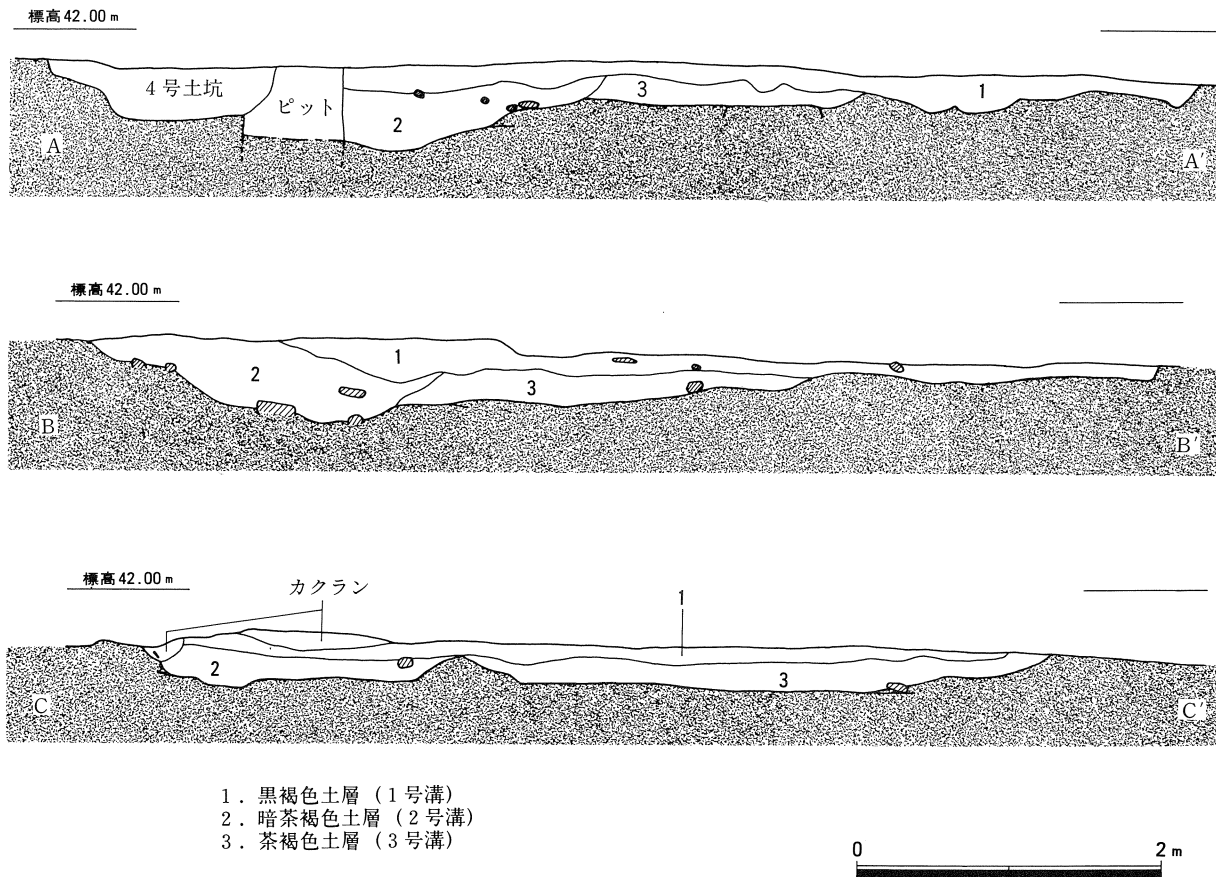


Fig. 3 溝状遺構土層断面図 (1/40)

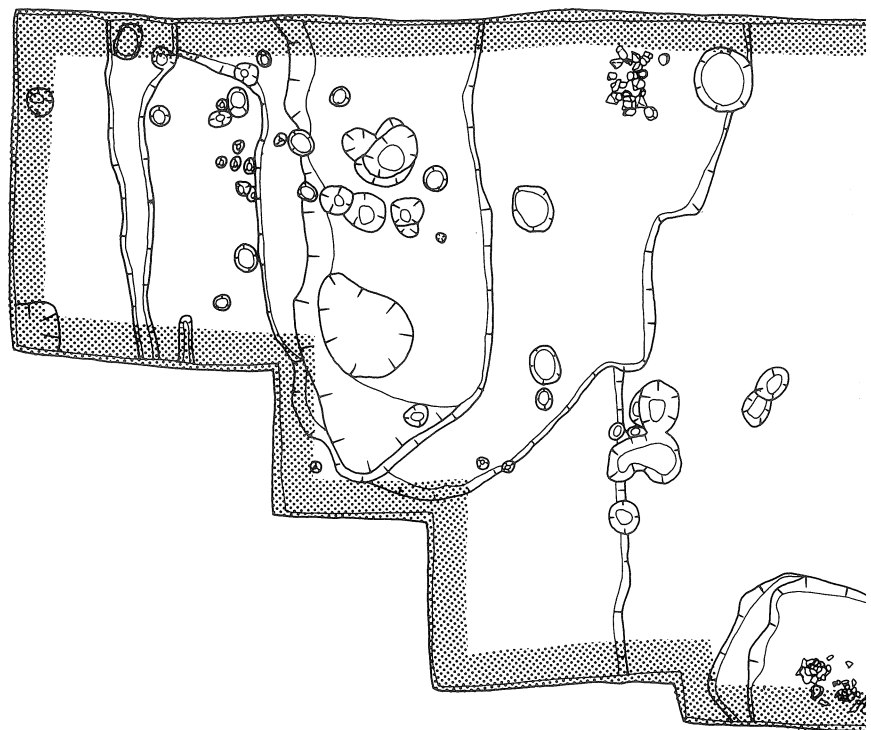
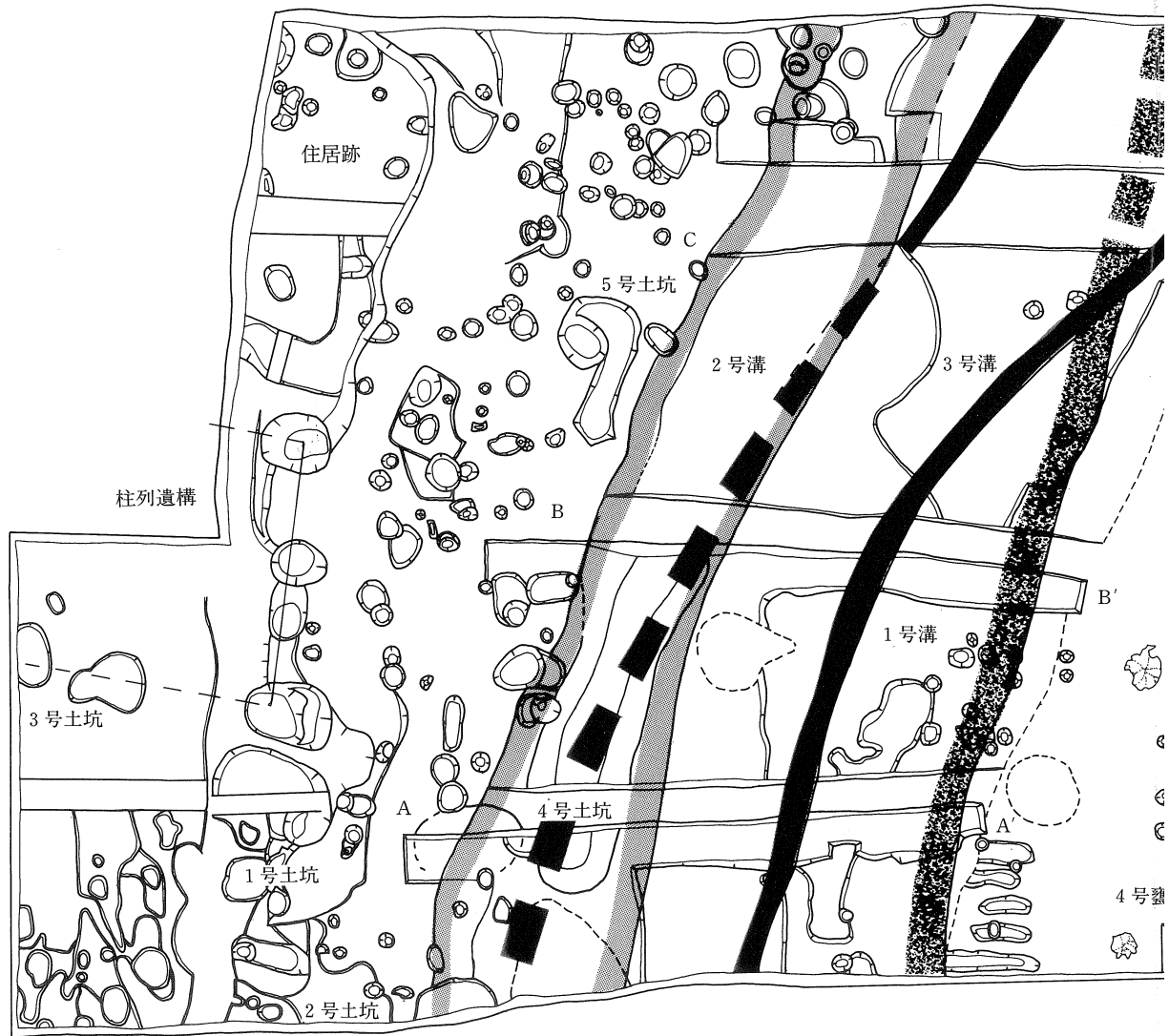


Fig.4



0 5 m



Fig. 5 溝状遺構土器出土状況

(2) 甕 棺

溝状遺構と1、2号甕棺の間で2基が検出された。いずれも大きく削平されており、下部がわずかに残されていたにすぎない。このため掘方も不明である。いずれも古墳時代前期のものと考えられる。

3号甕棺

調査区の中央やや南側で検出された。甕棺は主軸をほぼ南北にとり、口縁を北側にして水平に埋置されていた。棺には器高約70cmの大型の複合口縁壺を使用しており、出土状況からみると単棺と思われる。副葬品は出土しなかった。複合口縁壺の胴部は肩の張らない偏球形で、口縁部の屈曲にはシャープさがなない。調整は外面が粗いハケで、内面は粗いケズリである。時期は布留式の新しい段階に相当すると考えられる。

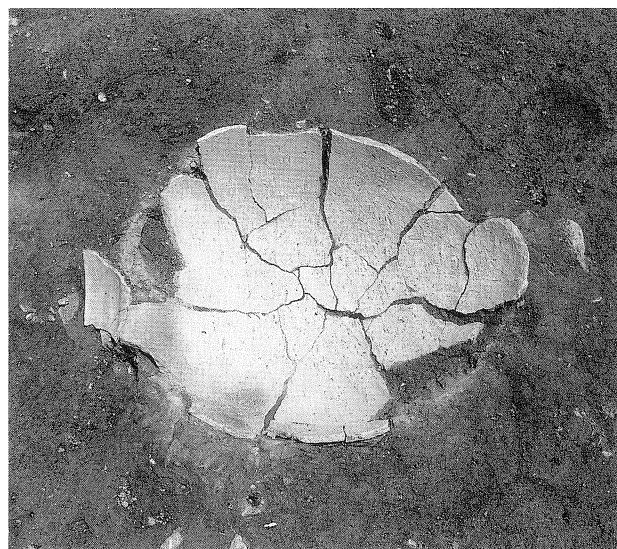


Fig. 6 3号甕棺

4号甕棺

調査区中央の南端で検出された。甕棺は主軸をほぼ東西にとり、口縁を西側にして水平

に埋置されていた。棺は削平のため胴部のみしか残されていなかった。これも単棺と考えられる。棺内からメノウ製の丸玉が出土している。棺には胴部が球形の壺形土器を使用している。器高は40cm程になると思われる。調整は外面が粗いハケで、内面は粗いケズリである。時期は3号甕棺と同時期ではないだろうか。

(3)住居跡

調査区の北西隅で検出された。部分的に検出したのみで、西側調査区外に広がっている。平面プランは隅丸の方形ないし長方形になると考えられる。一辺の長さは約5mで、深さ約30cmが遺存する。周壁溝と考えられる溝を部分的に検出しているが、屋内土坑になる可能性も考えられる。住居内では若干のピットを検出したが、支柱穴は確認できなかった。弥生土器が出土しているが、ほとんどが床面から浮いた状況である。出土遺物からみると時期は、弥生時代後期前半と考えられる。

(4)土坑

1号土坑

溝状遺構の西側で検出された楕円形の土坑である。長径約150cm、短径約100cm、深さ約20cmである。南側は削平を受けており、残りは良くない。遺物は弥生土器片、土師器の高杯、椀が出土している。時期は布留式の新しい段階であると考えられる。

2号土坑

溝状遺構の西側、調査区の南端で検出された。楕円形の土坑で長径約110cm、短径約70cm、深さ約30cmである。遺物は土器片が出土しており、時期は弥生時代後期である。

3号土坑

調査区の西端で検出された瓢箪形の土坑であるが、著しく削平を受けており残りは良くない。長さ約110cm、幅90cm、深さ約10cmである。遺物は土器片が出土しており、時期は弥生時代中期末～後期初頭である。

4号土坑

溝状遺構の西側に重複して検出された。溝状遺構埋没後に掘られたピットをさらに切って掘られている。溝状遺構に設定したサブトレンチを掘る際に、誤って南半分をとばしてしまった。また、北半分は土層観察用のベルトにかかっていたため掘っていない。断面の観察によると長さ150cm、

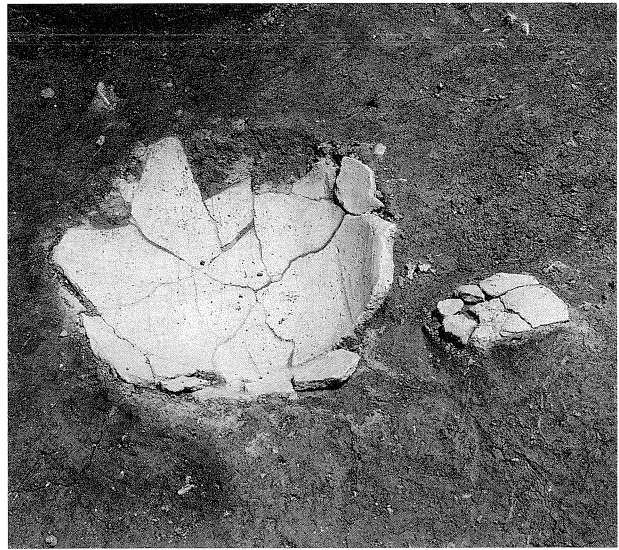


Fig. 7 4号甕棺

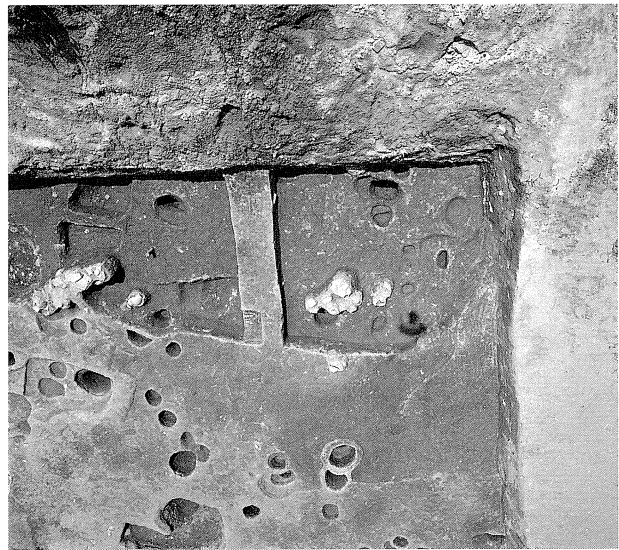


Fig. 8 住居跡

深さ35cmである。平面プランは楕円形になると思われ、短径は80cm程度になると思われる。遺物については確実に伴うものを確認していないため、時期は不明である。

5号土坑

溝状遺構の西側で検出された不整形の土坑で、南に延びる溝が取り付いている。土坑本体は長さ約110cm、幅約90cmである。2段掘りになっており、南側が深くなっている。深さは北側で約30cm、南側で約50cmである。溝は長さ約140cm、幅約40cm、深さ約30cmである。遺物は土器片が出土しており、時期は弥生時代後期である。

(5)柱列遺構

調査区の西端で検出された。柱穴3個が南北方向に直線上に並んでおり、間隔は約210cmと約170cmである。南端の柱穴が110cm×90cm、北端の柱穴が100cm×80cmと大型である。深さはいずれも約50cmである。中央の柱穴は80cm×65cmとやや小さく、深さは約50cmである。ただし、3号土坑がこの柱列に関連するものであれば、掘立柱建物になる可能性もある。いずれの柱穴からも土器片が出土しており、時期は弥生時代後期である。

3. II区 (427-1番地) の調査

調査地点は1号、2号甕棺墓の北東に位置する。個人の宅地内ということで調査範囲が限られていたため、宅地の南西隅にほぼ東西方向に長さ8.4m、幅2mのトレンチを設定した。

トレンチの西半部は地表面から約60cmで地山が検出されたが、東半部では検出できなかった。そこで東半部については、トレンチの南壁に添ってサブトレンチを設定し地山を検出することとした。地山は東に行くにつれて下がっており、トレンチ東端付近ではほぼ水平になり、その東側は若干上がっていた。これより東側についてはトレンチを拡張することができなかったため、どのような状況であるのか確認することができなかった。

この落ち込みの埋土はFig. 9の8~10、12層である。その上の1~7層は後世の耕作土および整地層である。遺物は10層から土器片がわずかに出土している。土器片には須玖式の甕の口縁や突帯文土器の甕と思われるものがみられる。このことから落ち込みは弥生時代中期以降に埋まった

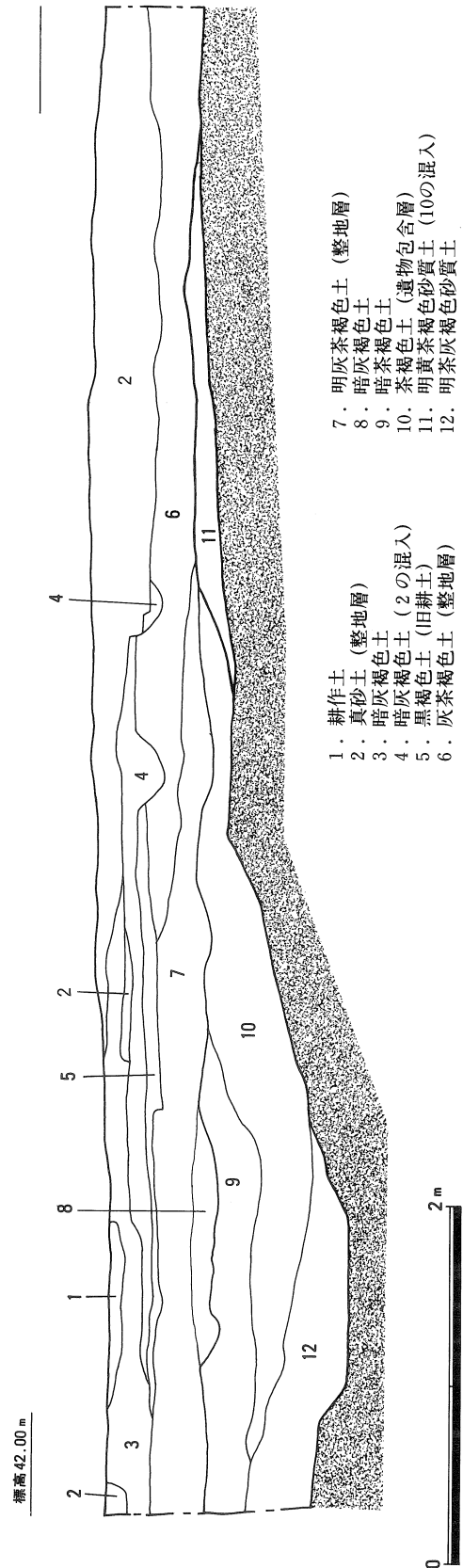


Fig. 9 II区土層断面図 (1/40)

ものと考えられる。この落ち込みはその検出位置、規模、遺物の出土状況から、甕棺の墓域を画するものとは考えられない。人工の溝であるのか、自然の谷であるのかは即断できないが、後者の可能性が強いのではないかと考えられる。

トレンチの西半部には遺構はほとんど無く、ピットが若干検出されたのみである。

4. Ⅲ区 (436番地) の調査

調査地点は1号、2号甕棺墓の南に位置する。現況は畑であり、その一部に南北方向に長さ13.5m、幅2.5mのトレンチを設定した。調査地点は昭和50年度から開始された三雲地区は場整備事業施工時に盛土され、遺跡が保存されていた。地表から約70cm真砂土の盛土がなされ、その下に旧耕作土があり、2層の遺物包含層をはさんで約110cmの深さで遺構面が検出された。包含層はいずれも遺物は少なく、弥生土器、土師器の他に陶磁器が出土しており中世以降のものと考えられる。

(1)住居跡

1号住居跡

調査区中央で検出された。部分的に検出したのみで、遺構は調査区外に広がっている。方形または長方形の住居で、検出された一辺の長さは3.3mである。深さは約30cmが遺存する。幅約15cmの周壁溝が巡る。火災にあっているようで、炭化した木材が検出された。出土遺物には弥生土器、土師器があるが、破片ばかりで完形品は全く無かった。時期は古墳時代前期と考えられる。

2号住居跡

調査区南端で検出された。部分的に検出したのみで、遺構は調査区外に広がっている。こちらはプランを確認しただけである。2.7m×1.8m以上の方形または長方形の住居である。サブトレンチで確認したところ、深さは約30cmであった。出土遺物には弥生土器、土師器があり、時期は古墳時代前期と考えられる。

(2)土坑

調査区南端で2号住居跡に重複して検出された。住居跡埋没後に掘り込まれている土坑で、これもプランを確認しただけである。遺構は調査区外にも広がっているため、全

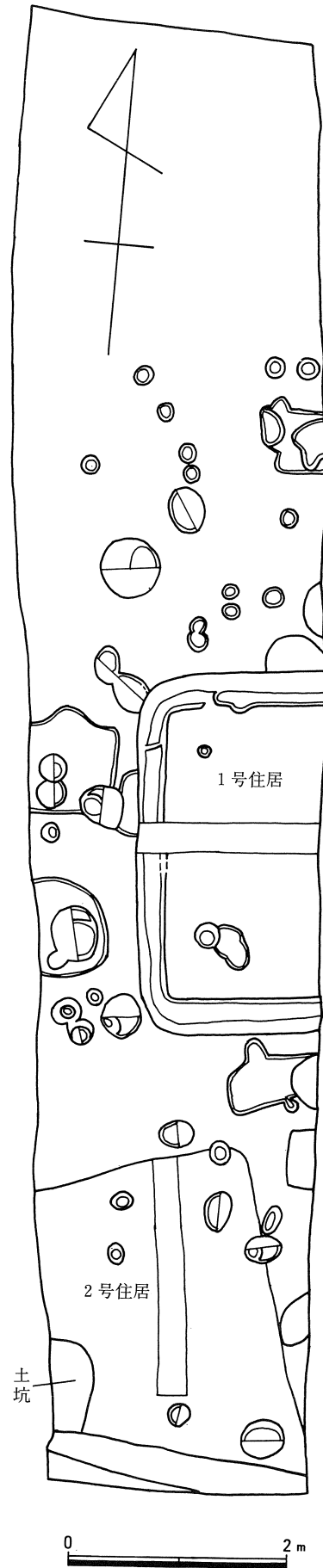


Fig. 10 Ⅲ区全体図 (1/60)

形は不明であるが長径80cm以上、短径40cm以上の楕円形もしくは隅丸方形になると思われる。

Ⅲ. おわりに

今回の調査の目的は1次調査で検出された溝が甕棺の墓域を区画するものかどうかを確認することであった。1次調査で検出された溝は予想どおり、北に向かって延びていることが確認された。溝は3条あることが確認され、それぞれ1次調査における「大溝」、「祭祀溝」、「小溝」に対応するものであろう。これら3条の溝は、1次調査の結果から予想された方向より東側に振れていることが判明した。また全体に南側が残りがよく、北側は悪い。

1号溝（1次調査における「大溝」に相当する）は幅約5～6mあり、場所によってかなり幅が違うようである。出土遺物には弥生時代中期末の土器から土師器がみられる。時期的には古墳時代前期まで下るものと考えられる。2号溝（1次調査における「小溝」に相当する）は幅約2.5mで完形品含む多量の土器を出土している。時期的には弥生時代後期前半～中ごろのものが主体をしめているようである。とくに溝底付近には完形に近い複合口縁壺、甕などがみられ、これらは後期前半のものであり、この時期には溝が存在したものと考えられる。3号溝（1次調査における「祭祀溝」に相当する）は幅約3.3m、1号溝、2号溝に切られているため全体に残りは良くない。出土遺物は弥生時代中期末ないし後期初頭の土器が主体となっているようである。器種は甕、高杯、袋状口縁壺、無頸壺、鉢等がみられる。いずれも精製された胎土で丹塗を施した、いわゆる祭祀土器である。ただ完形品はみられず、いずれも破片である。この溝は時期的にみて甕棺墓に伴うものと考えられる。

以上のことからこれらの溝が甕棺墓の墓域を区画する溝である可能性は高くなったと考えられるが、調査区内でコーナー部分を確認できなかったため区画の溝と断定するまでには至っていない。また、3号溝が弧を描いていることから、区画が円形もしくは楕円形になる可能性も考えられる。いずれにしろ北側の確認調査が必要であろう。

次に1、2号甕棺墓には墳丘が伴っていた可能性が高いことが考えられる。調査区内の遺構の検出状況を見ると、溝の西側には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構が多く検出されているが、東側（甕棺側）からは同時期の遺構としては甕棺墓2基（3、4号）が検出されているのみである。3、4号甕棺が著しく削平されていることから、古墳時代前期には溝の東側は西側に較べある程度高くなっていたと考えられる。1、2号甕棺墓の検出されたレベルからみても、この高まりが同甕棺墓の造営に伴って築造された墳丘であることは充分考えられることである。

以上調査の成果をまとめてみたが、出土遺物については現在整理中であり、まだまだ問題も多く残されている。今後の検討の結果によっては変更されることもあることをお断わりしておきたい。

(引用文献)

柳田康雄編 1985 『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県教育委員会



Fig. 11 I区全景

報告書抄録

フリガナ	ミクモ・イワライセキグンチョウサガイヨウ (1)							
書名	三雲・井原遺跡群調査概要 (1)							
副書名	福岡県前原市大字三雲・井原所在遺跡群重要遺跡確認調査概要							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第62集							
集者名	角 浩行							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	福岡県前原市大字前原623							
発行年月日	西暦 1996年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ミクモイワライセキグン 三雲南小路 イセキ 遺跡	前原市大字三雲 南小路			33° 32' 00"	130° 14' 21"	1995.3.1 ~1996.3.29	500	重要遺跡確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三雲南小路遺跡	墳墓 および 集落	弥生時代中期~ 古墳時代前期	溝 3 甕 棺 2 住居跡 3 土 壇 5	弥生土器、土師器、石器、 鉄器等				

三雲・井原遺跡群調査概要(1)

前原市文化財調査報告書

第62集

平成8年3月31日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623番地

印刷 株式会社 ぎょうせい